

---

# 10年目の約束

伊藤幽介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

10年目の約束

### 【Nコード】

N9512J

### 【作者名】

伊藤幽介

### 【あらすじ】

今年で、ハタチ。

賑やかな、そして旧友の豹変ぶりに驚かされる成人式を迎えた僕は、幼き頃交わした、あの約束を思い出していた。

10年前の今日、見知らぬ女と交わした、体を返す約束。

彼女は、取りに来るのだろうか。

「いいね〜っ！いやー、ホント、いい話でした！！ウン！！…ん  
じゃ、次の人お願いします〜っ！！」

今日は成人式だ。

久々に帰った地元はあまり変わっておらず、多少落胆を覚えたが、  
この昔馴染みの進行役も、外面は変わっても内面は変わっていない  
らしい。目立ちたがり屋で、おしゃべり。

今はすでに成人式も終わり、中学時代の級友と一次会へと来ていた。

40人近くいるだろうか。予約していた料亭に集まり、集まった部  
屋は酒と煙草の臭いが充満していた。

18時。まだ早い時間帯なのに皆ベロンベロンに酔っ払い、現在は  
一人一人が立ち上がって面白おかしい話を発表する場になっていた。

僕の隣の、名前がはつきりと思い出せない男が立ち上がり、頬を紅  
潮させながら話始めた。酒のせいか緊張のせいか、呂律がまわって  
いない。

そんな彼を僕は茶碗蒸しを片手にぼんやりと眺めていた。

「…でさ……だったんだよ。ね、凄くない？…はい！！僕の話は以  
上で〜っす！！！！」

わあっ！！っと、これまた酒のせいか盛大に場が盛り上がり、拍手

が巻き起こり歓声が飛ぶ。彼は少し安堵したかのように腰を下ろした。

「はいお疲れ。いやいや緊張してたな尾崎！！皆聞き取れたあ？」

そつだ彼は尾崎だ。下は特に興味はない。

「…っはっはっは！！確かに確かにい！！じゃ、ま、尾崎君には発音練習をしておくように忠告しておくとして…次の人！！オモロイ話、おっねがいしまっすっ！！」

周りの目がこちらを向く。

そつか、そういえば僕の番だ。

不意を突かれた形になった。完全に油断してた。まだ何を話すか決めていない…。

とりあえず僕は立ち上がる。クラスでも隅っこを好んだ僕なので、特に元気のいい声援は聞こえてこない。しかしこれまた盛大な拍手が起こる。

「え~~~~っつと~~~~…」

どうしようか。何がこの場に相應しい…？

その時僕は思い出した。

そつだ、あの話がいい。今日が、確かその日だったはずだ。

「えー…よし。じゃあ、話します。」

再びの拍手。

「この話は10年前、そう丁度10年前のこの成人式の日、僕はまだ10才で、オバアチャンの家に行くことにしたんだけど、一人で電車での遠出は人生で初めてのことだったんだ。」

僕はほとんどまくしたてるように話し始めた。

「それまでは家族総出、ワゴン車に乗って行くのが常だったけど、一人で行きたいという思いもあった。別にそれはオバアチャンへの敬愛の念が強いとかそういう理由ではなくて、単に僕は孤独が好きだったんだ。一人で旅をする名目上、オバアチャンの家が一番適していたわけ。

念願通り親に一人旅を許された僕は、一人で電車に乗り込み、オバアチャン宅を目指した。

オカアサンに9個目の駅で降りなさいって言われてたのに、僕は寝込んでしまっていた。

駅員さんに起こされ気が付いた時にはもう終点の駅で、それはそれは片田舎の小さな駅だった。

人がいない。駅員さんはすぐにどこかに消えていっちゃったし、本当に誰も。周りを見渡した僕は、完全に孤独を感じていた。まあ、

つまりそれは僕の幸福を示す言葉なんだけれども。

駅名は漢字が難しくて僕には読めなかった。自白するけど小学生当時僕は、こと漢字に関しては絶大な苦手意識を持っていたんだよ。

時刻表を確認すると、どうやら次の電車は30分後らしい。僕は誰もいないことの幸せをかみしめていたが、それでいて何故か脈は速くなっていた。他に何もしようが無いので、そのままホームで1人、電車を待っていた。

冷たい風が露出した頬を刺す。ポケットに手をつ込みながら僕はその寒さに耐えた。

永遠に続くかと思ったその待ち時間も、やはり終わりはあったようだ。

キキーツという電車独特の音が聞こえる。

音がするほうを横目で見ると、灰色の電車がホームに入ってくるところだった。非常に遅い。その灰色とスピードから、僕の頭にはどんな臭い子供の象が鳴き声を上げ始める。

終点の駅なのに、ホームには僕の他誰もいない。駅員さんさえ見当たらない。

その状況に何となく心躍らせながらベンチから立ち上がる。さあ、この寒さとも、孤独ともおさらばだ。象に乗ってオバアちゃん家に行かなきゃ。

黄色い線まで行こうと右足を出そうとした、まさにその時だった。

不意に、両足首を握られる。それも、物凄い力で。

それは人間の手のようだった。…誰かに持たれた？誰に？

そんな問いを遮るように、経験したことのない痛みを感じ、僕は叫んだ。足首がメキツと音をたてるのがわかる。

体勢を崩して倒れた込んだ先は線路だった。

左から象が走ってくる。いやそれはもう象ではなかった。先程とは違い、それは異常にスピードを出し、僕を狙っていた。

死。

それはあまりにも突然に意識させられた。象はすでに無機質な殺戮の機械へと変貌を遂げ、僕は夢うつつに恐怖する。

キキーンッ！…！音の割に速度を緩める気配はない。

そして、そのまま僕は轢かれて確かに死んだ。

…はずだった。

気付くと僕はまたホームに座ってた。

目を擦り、自分の体を見つめる。どこも怪我をしていなかった。

：

おかしい。さっき僕は確かに死んだ。死んだと思ったのに…。

ちらつと足首を見える。メキツと音をたてて砕けたはずの僕の足首は、オカアサンに用意してもらった綺麗な靴下にちゃんと収まっていた。

：夢。そうか夢なんだな。そう理解した僕は特に気にはしなかった。

再び、電車を待つ。僕は欠伸をしながら、ほどけかけた靴紐を縛り直し始めた。手首にしたミッキーの腕時計が目に入る。もうこんな時間なんだ…。

：

視線を感じたのはその時だった。ゆっくりと顔を上げる。

目の前に女の人が立っていた。白い肌に白の服。髪は驚く程に長く、後ろ髪は地面すれすれまで伸びていて、目をきつく閉じている。

死んでいるんじゃないかと思わせるほどに血の気がない。首筋にある黒いホクロが1つあり、それが女の人の異常な白さをより引き立てていた。

女の人が目をカッと開いた。その瞳は真っ赤で、その時初めて女の

人に恐怖を感じる。

女の人は怯えた僕を見てニタアアツと笑い、話し掛けてきた。それは異常なまでに早口で、僕は聞き取るだけでも精一杯だった。

「あなたさつきしんだのよわたしがころしたのわたしがあなたをころしたのもしだったらいきかえらせてあげようか？でもあとじゅうねんだけねじゅうねんだけそのあとのじんせいわたしはわたしがわたしがたのしんであげるからねねそれでいいでしょう」

本当に早口だった。僕は正しく思考も整理もできないまま、ただ何となく「どうして？」って聞いた。それを聞いて女の人は酷く怒ったような顔をした。

「いやならしぬのよいますぐここでいますぐにただしぬだけそれがいやならあとじゅうねんいきてじぶんのじんせいをたのしんでたのしんであとわたしにくれたほうがとくだとおもうんだけどなあねえあなたもそうおもうでしょねえいいでしょう」

僕は単に死ぬのは嫌だから「いいよ」って言ったんだ。そしたら女の人は凄く嬉しそうにニタアアツと口が裂けたかと思わせる程に笑った。

「いったないったなおまえいまいいよていったなやくそくしたなおまえたしかにいいよてそういったな」

女の人は更にニタアアツとして、僕はもう本当に口が裂けたんじゃないかと思った。

「うれしいうれしいいいじゃああとじゅっねんよあとじゅっねんよ  
じゅっねんたつたらわたしのものよきようこのひがじゅつかいおと  
ずれたそのひがあなたのおわりちゃんとおぼえていおいておぼいて  
おいて…」

女の方はそう言つと瞬きの間になくなつたんだ。

しばらくするとまた電車が来た。それはやはり象のようで、僕は勢  
いよく立ち上がったけれど、今度は誰にも足を持たれなかった。

僕はそのまま家に帰つて、今日という日まで生きてきた。」

シンと場が沈んでしまつた。何人かは携帯を開き、日にちを確認し  
ている。

誰もが驚いたような、また疑うような目つきで僕を見つめていた。

「お、おいおい…お前まさかそれって…今日か!？」

進行役がまるでつぶやくように言った。僕は彼の眼を見つめる。

「そうだよ。約束した日は、今日なんだ。だから僕もさつき思い出  
した。そう言えば今日、約束の日だなぁって。あの時、腕時計を見  
たから、彼女と約束した時間は正確に思い出せる……予告の時間ま  
であと…55秒」

この世界のすべてが息を止めたようだ。空気が完全に凍りつき、誰  
もが時を数える。

「皆はさ、僕がどうなると思う?? ははは、僕は信じないけどね。

あやふやな記憶だし…」

3 0 … 2 1 … 1 5 …

「皆そんな顔すんなよ。話は本当だよ。誓って嘘じゃない。けどまさか、僕がどうこうならないだろ。呪いなんて、あるはずないじゃないか。」

1 0、 9、 8、 7、 6 …

「あゝ早くその時間が来ないか… ツツ…！？！？」

一瞬にして、彼は消えた。

いない。なぜか彼はここから消えてなくなった。

なぜ…？ いやむしろ…どこに消えた！？！？

「お、おい！？生きてるか？どこだ…」

その場にいた全員総出で彼を捜す。酔いも一気に覚め、鳥肌が立っていた。

「…ヒツ…！！！！　ねえっ！！皆ちよつと来てツツ！！」

青ざめた顔をした女が、障子から顔を出し悲鳴に近い大声をあげた。廊下を指差すその手は震えている。

全員が彼女の近くに集まった。彼女は辛うじて立っている状態のようだ。

彼女の指差す先には、おそらく電車に轢かれたのであろう、赤い肉と血の塊となった子供くらいの大きさの死体が転がっていた。

だがそこは、旅館にある木で造られた至って普通の廊下。電車や車など、通るはずもない。

…クスクス……

後ろから声が聞こえ、震えながら死体を見ていた者達全員が即座に振り返った。

ウフフフ……

彼が座っていた場所には、真っ白の服を着た、髪が長い女性がクスクスと笑いながら座っていた。

「ねえみんなつぎにはなすのはわたしのばんかなあおもしろいはなしならたくさんしっているんだよ…」

（後書き）

「10年目の約束」いかがでしたでしょうか。

16歳の夏に書いたものですが、かなりの部分を修正しました。

またお手数ですが誤字・脱字等がありましたらお知らせください。

読んで下さり、ありがとうございます。

また「ドアを開けたら」も24日に公開しましたので、読んでみて下さい。こちらにもすぐに読み終わると思います。

最後に、感想・レビューなど簡単にでもいいのでお願いします。

これからの執筆活動の糧にしていきたいと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9512j/>

---

10年目の約束

2011年10月6日18時57分発行